

国際日本研究センター 海外大学・研究機関調査
ベルギーにおける日本語・日本学の教育及び研究の現状と課題

特定専門員 有澤 知乃

2009 年 12 月

2009 年 11 月 16 日～21 日の期間ベルギーに赴き、日本語・日本学のコースを有する大学を訪問して、担当教員及び学生に聞き取り調査を行った。本報告では、上記のフィールドリサーチで得られた情報を基に、ベルギーにおける日本語・日本学の教育及び研究の現状と課題についてまとめる。

【社会的背景】

ベルギーは、北部のオランダ語共同体と南部のフランス語共同体に大きく二分されるが、南東部のドイツ語共同体も含めると、三つの言語に基づく共同体から構成されている。ベルギーにおける日本語教育は、オランダ語共同体において盛んであり、その歴史も他の二つの共同体と比べて古い。

大学レベルでの日本語・日本学教育は、1958 年にゲント大学（オランダ語共同体）で東方東欧・アフリカ研究所が設立され、日本学専任教授が就任してから始まった。1980 年代に入って日本に対する社会的関心が高まると、高等教育レベルでの日本語教育のウェイトも高まり、更に、語学学校や市民・一般教育レベルにおいても、日本語学習人口が増加した。1990 年以降、日本語のコースを開設する機関が増える傾向にあったが、2000 年前後の景気低迷や中国語に対する関心が強まったことから、日本語学習者数はやや減少した。だが、2004 年以降は、日本語学習者の数は再び増加している。また、マンガやアニメといった若者文化への関心から、学習者層が低年齢化している傾向がみられる。

日本や日本語に対する近年の興味の高まりは、ここ数年の日本人居住者の増加にも要因がある。なぜなら、日本人居住者の増加に伴い、現地の日本人会や、ベルギー・日本協会、商工会議所、日本人学校、日本大使館の文化センターといった機関が、ベルギーにおける日本理解をより一層推進すべく、様々な催しを開催したり情報を提供したりするようになったからである。

現在、独立した日本学専攻課程が設けられているのは、オランダ語共同体のルーヴァン・カトリック大学とゲント大学の二校。フランス語共同体の大学では、日本学専攻としての独立した課程は存在しないが、リエージュ大学とモンス＝エール大学で、選択科目として日本語と日本学の履修が可能である。以下、今回訪問した、ルーヴァン・カトリック大学、ゲント大学、リエージュ大学における日本語・日本学教育の特色と課題についてまとめ、その後、各校に共通する事項について述べる。

【ルーヴァン・カトリック大学】

ルーヴァン・カトリック大学は、ベルギー国内で最大規模の総合大学である。同大学での日本学は、極東地域研究の一端として 1932 年に始まったが、現代日本語のコースが開設されたのは 1963 年になってからである。その後も、日本語・日本学は東洋学の一部として位置づけられていたが、1986 年に初めて、独立した日本学専攻課程が、文学部東洋スラブ学科内に開設された。日本学専攻課程の学生は、ここ数年 30 % ずつ増加しており、2009 年度入学の学生は約 120 人。

取得可能学位

B A ・ M A ・ P h . D .

開講科目

日本語：文法・会話・ライティング

日本学：歴史・言語学・日本語学・日本語教育・古典文学・中世文学・近世文学・近現代文学

専任教員

現在専任の教員として、教授が 3 名と、講師が 5 名勤務しており、その内 4 名は日本人講師である。（以下参照）

主任教授：ウィリー・ヴァンドゥワラ（日本対外関係史）

教授：ポール・ヴァンドゥマーシェ（国際関係論）

教授：ドミトリー・ヴァンヴァーベク（日本史）

主任日本語講師：櫻井直子（日本語教育）

ヴァンドゥワラ主任教授は、ヨーロッパにおける日本研究の第一人者でもあり、2006 年には、日本政府外国人叙勲・旭日中綬賞を受賞された。ルーヴァン・カトリック大学における日本学専攻課程開設の立役者でもある。また、櫻井主任日本語講師は、ベルギー日本語教師会会長も勤めている。

コース設立背景と教育目的

上述のヴァンドゥワラ主任教授の談話によると、日本学専攻課程を開設させた動機は、日本に関するスペシャリストを養成するためであった。当時、日本語・日本学は広義の「アジア研究」に位置づけられていたので、アジアに関する一般的知識を得ることはできたが、日本に関する深い知識と教養を身につけることは難しかった。日本学専攻課程の開設にあたって、まずは「日本語」教育を最重点課題とし、日本語教育の教員を充実

させた。

同教授によると、氏が東洋学の研究を始めた 70 年代には、この種の研究はメインストリームではなく、「かわった人」と見られていた。しかし、1980 年代は日本が世界の「エコノミック・パワー」として台頭し、日本に対する関心が世界的に高まりを見せた。その結果、日本研究も脚光を浴びるようになったので、ルーヴァン・カトリック大学で日本学専攻課程を開設することも、困難ではなかったとのことである。



ウィリー・ヴァンドゥワラ教授



学部 2 年生「初級日本語」の授業（櫻井直子先生）

使用教科書

『現代日本語コース』（名古屋大学出版会）

学部 1 ～ 2 年：上記教科書 1 & 2（初級）

学部 3 年・修士 1 年：上記教科書 3 & 4（中級）

上記の教科書がメインの教材であるが、各教官が他の教材も補足的に用いている。3 年以降は、日本語自体を引き続き勉強するが、日本語で何かを学ぶという視点も取り入れている。日本のメディア（新聞・ラジオ・テレビ）を使ったりする。文法の授業に關しても、ニュアンスの問題など、より分析的なアプローチを行っている。

E ラーニング

1997 年より、ハンス・コッペン氏による、「情報コミュニケーション技術（ICT）プロジェクト」が進められており、ウェブ上での漢字テストなどが導入されている。

コッペン氏による ICT プロジェクトのウェブサイト

<http://hanscoppens.net/>

交流協定校

信州大学・関西大学・九州大学・早稲田大学・上智大学・立教大学・成蹊大学・成城大

学（上記の大学のうち、九州大学との協定は終了予定。）

問題点

第一に、学生数が年々増加しているのに対して、教員の数が足りないのが問題である。専門性を持った教員がもっと必要で、少なくとも、もう 1 人の教授と、2～3 人の研究員が必要である。現在の教員は非常勤ばかりなので、専任の教員がもっと必要。（ヴァンドゥワラ教授談。）

第二に、交換留学に関する問題がある。ヨーロッパの大学であれば、エラスムスプログラムによる単位の互換が可能であるが、日本の大学とは単位の互換性が無い場合が多いことが問題である。また、奨学金が取れないと日本へ留学することは学生にとって困難である。（櫻井講師談。）

連絡先

ウィリー・ヴァンドゥワラ主任教授

Prof. Dr. Willy Vande Walle
Catholic University of Leuven
Department of Oriental and Slavonic Studies
Section of Japanese Studies
+32-16-324948
willy.vandewalle@arts.kuleuven.be

櫻井直子主任日本語講師

住所は、ヴァンドゥワラ教授と同じ
+32-16-324732
Naoko.sakurai@arts.kuleuven.ac.be

【ゲント大学】

前述の通り、ゲント大学はベルギーにおける日本研究発祥の大学である。日本学課程は、文学部、南・東アジア言語文化学科に属しており、日本学の他に、中国学とインド学を学ぶことができる。現在、教員や学生の数では、上記のルーヴァン・カトリック大学が勝っているが、ゲント大学においても日本語を専攻する学生数はここ数年増え続けており、2009 年度入学の学生は 70 人である。上記の南・東アジア言語文化学科の中では、中国学が教員数、学生数などの点で最大規模だが、日本学を選択する学生が増加しているのに対して、中国学はここ数年縮小傾向にあるという。後述のニーハウス主任教授によると、メディアがもたらす、中国に対する否定的なイメージが原因かもしれないということである。韓国学は、数年前に予算が削られて消滅した。

取得可能学位

B A ・ M A ・ P h . D .

開講科目

現代日本語：文法・会話・ライティング・新聞購読（修士）・ビジネスライティング（修士）・文学翻訳（修士、例：吉本ばなな）

古典中国語（学部1・2年）

古典日本語（学部3年・修士）

近現代日本社会（学部2年・3年・修士）：歴史・地理・経済・社会・教育・企業文化・ジェンダーとマイノリティ・ポピュラーカルチャーなど

東洋文学

東洋哲学：儒教・国学・神道・近代宗教

日本研究方法論：日本研究者が知らねばならない知識（名前の付け方、時代区分、資料の探し方、論文の書き方など）

研究実習

仏教

専任教員

主任教授：アンドレアス・ニーハウス（日本学・身体教育）、ドイツ国籍

教授：クリスチャン・ウール（日本文学・思想史）

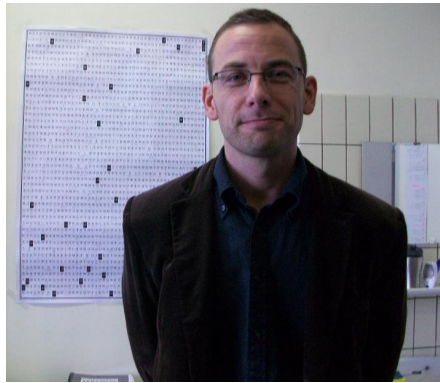
講師：カニエ・アコ（日本語教育）

（助手3人：クラウス・ピンテ、レスリー・デ・フリース、ミハエル・ハウスピー）

（ボランティア日本語教師：2人）

コースの設立背景と教育目的

ゲント大学日本学課程では、もともと宗教学や文献学（Philology）が強かった。以前、真言仏教の専門の教授がおり、当時は特に仏教研究が強く仏教の授業もあった。同教授が亡くなってからは、仏教研究は弱くなってしまった。現在はより近現代よりの科目やビジネス科目も増えてきている。日本経済のコース開設は、政府からの圧力のようなものも要因であった。学部教育の目的は、「人材を育てること」であり「役に立つ」ことを教えるべきであるという方針が、ゲント大学だけでなくヨーロッパ全体に見られるのではないかと語った。しかし、それでもまだゲント大学日本学課程の授業は思想などが中心である。（ニーハウス主任教授談。）



アンドレアス・ニーハウス教授



学部1年生のクラス

使用教科書

『げんき』（ジャパン・タイムズ）

上述のニーハウス教授によると、この教科書は学生のニーズに合わせて使いやすい教科書であるとのことであった。更に詳しい解説は、『日本語基本文法辞典』（ジャパン・タイムズ）などで補足する。また、国際交流基金が提供する「スーパーきつと1+」という教材も使用しており、これには、日本のお札や硬貨（模造）、絵を見ながら単語を学ぶシートなど、実践的教育で用いられる様々な小物が段ボール箱にセットで入っている。

同じく国際交流基金より提供されたビデオ教材、「ビデオ講座日本語」「The Way of Life in Japan (日本の生活)」も利用している。

また、近現代日本社会のコースでは、*An Introduction to Japanese Society*（日本社会入門、杉本良夫）を用い、日本文学のコースでは、*A History of Japanese Literature*（日本文学史、加藤周一）を使用している。

E-ラーニング

ゲント大学では、インタラクティブ・コンピューター・ラーニングを推進している。日本語の授業は週に 6 時間しかないので、E-ラーニングで補足が必要。授業で教えきれなかった漢字や、教科書『げんき』の DVDなどをウェブ上で見られるようにしている。

衛星中継授業

現在、法政大学国際学科と、衛星中継授業を試験的に行っている。これまで行った授業のテーマは、「世界の歴史における日本」や「日本のオリンピック運動とナショナルアイデンティティ」などで、使用言語は英語。

交流協定校

立命館大学（学部 3 年時に 6 ヶ月間）・金沢大学・神戸大学

京都スタディ・プログラム

ワールド・パースペクティブ・コース

NGO ワールド・キャンパス・ジャパン（日本で現地のコミュニティや機関を訪問する。）

その他研修制度

インターンシップ（修士課程履修時に 2 ヶ月間、日系の会社または、日本と関連のある会社及び文化機関で研修する。ベルギー日本協会、EU-日本センターの助成による。）

問題点

一番の問題は、生徒が日本に行ける機会が少ないこと。学部で 6 ヶ月間の日本研修があるが、受け入れ大学が不足しているし、学生の財政問題もあり、全員が行けるわけではない。単位交換の問題が出てくるので、ゲント大学のシステムと合った大学を見つけなくてはならない。

「友の会」

日本学課程の学生が発起人となって、「友の会」が 2008 年に発足した。これは、もともと、日本学課程の学生達が日本に旅行する資金を捻出するためのサークル活動であった。寿司、生け花、カラオケ、ドラマ、アニメ、空手などのイベントを企画し、そこから得た収入で、前述のニーハウス教授が引率して日本に 2 週間ほど滞在するという企画であり、2009 年に第 1 回目の渡航が実現した。

同会の発起人及び現主催者である、アーネ・デプレッツ君とドミニク・ボーム君の話によると、現在は、日本旅行の資金捻出だけでなく、学生の日系企業への参観なども企画しているという。また、食べものやポップカルチャーの紹介だけではなく、「日本に

におけるマルクス主義」や「日本における西洋主義」といったテーマの勉強会も行っている。

同会のおかげで、日本課程の学生達はお互いに助け合い、また教員と学生との連携も深まったとのこと。今後も、色々なイベントを企画して行きたいと二人は意気込みを語ってくれた。



「友の会」主催者：アーネ・デプレッツ君とドミニク・ボーム君

「友の会」ホームページ

<http://www.southandeastasia.ugent.be/Japanologie#tomo%20no%20kai>

連絡先

アンドレアス・ニーハウス主任教授

Professor Andreas Neuhaus

Language and Cultures of South and East Asia

University of Ghent

Blandijnberg 2, 9000 Gent, Belgium

+32-9-264-4157

andreas.niehaus@Ugent.be

【リエージュ大学】

リエージュ大学（フランス語共同体）では、日本語・日本学は、哲学文学部の内、言語・近現代文学科の選択科目として位置づけられている。同大学では、1993 年から日本人講師による日本語の授業が開始した。また、1991 年に、国際交流基金からのサポートもあり、当時の名誉教授が発起人となって日本研究センターが開設したが、2002 年に予算問題などから廃止された。しかし、同大学のアンドレアス・テーレ教授の尽力により、2010 年 3 月には新しく日本研究センターが開設される予定である。また、セ

ンターには、およそ 2,000 冊の日本や日本研究に関する書籍や、日本語の視聴覚資料などの資料が完備することとなり、研究者や学生が誰でも活用することができるようになる。

開設科目

日本語：日本語入門

日本社会

日本哲学（東洋思想の科目内）：儒教・仏教・神道・比較思想

学部の授業とは別に、ゴトウ・カナコ氏による日本語のクラス（日本語Ⅰと日本語Ⅱ）もあり、2009 年どは、約 60 人（前者）と 22 人（後者）の学生が受講している。

使用教科書

後述のテーレ教授が作った、オリジナルテキスト、*Introduction a la langue et a l'ecriture japonaises*（日本語入門、リエージュ大学出版）を使用。同教授は、筑波大学で研究していたことがあり、同大学で用いられていた日本語の教科書からの抜粋と、テーレ教授が個人で選んだ新聞記事や、JTB の資料からコピーした旅行用語などを取り混ぜて、教科書を作った。他に、日本語能力試験対策として、練習問題などを掲載している。学生の興味は様々なので、色々な題材を選んで作ったという。教科書の中の解説は、英語とフランス語。

テーレ教授は、他の日本語教育機関等によく使われている *Japanese for busy people* などは会話重視の教科書であるが、テーレ教授は読み書きも重要と考えているので、自分のオリジナル教科書を作ったそうである。

専任教員

教授：アンドレアス・テーレ（東洋思想）、ドイツ国籍



アンドレアス・テーレ教授

E-ラーニング

リエージュ大学では、E-ラーニングを推進しているが、テーレ教授のクラスでは特に利用していない。授業内で、対面で学んだりディスカッションしたりするほうが、より重要であるから、現在のところ E-ラーニングは推奨していない。

交流協定校

現在、交流協定校は制定されていない。

問題点

一番の問題は、授業時間が少なすぎることである。(週 2 時間。) もっと日本語担当の授業と教員が必要で、特にネイティブの日本語教師が不可欠。日本学センターがあったころは、図書館に日本関係の本がたくさんあったが、今ではどこかに押し込められてしまって、学生が手に取って見ることができない。オランダ語共同体の大学に行けば、もっと充実した授業が受けられるが、フランス語圏の学生には言葉の壁がある。現時点では、パリの大学に行くのが唯一の選択肢。

現在リエージュ大学では、日本語・日本学のコースが、日本学専攻として一つの課程に統合されていないので、学生のバックグラウンドや興味は様々。異なる学年の学生が同じ授業を履修していたりするのも問題。

オランダ語共同体のほうが日本との交流が盛んなので、政府のサポートもあるようだ。フランス語共同体では、第三世界のほうにもっと関心があるのか、日本語・日本学へのサポートはあまりない。国際交流基金でも、オランダ語共同体の大学(ルーヴァン・カトリック大学やゲント大学など)を優先して助成しているようだ。(テーレ教授談。)

連絡先

アンドレアス・テーレ教授

Professor Andreas Thele

Department of language and modern literature

rue de Pitteurs 20 (Bat. L3)

4020 Liege, Belgium

+32-4-366-5583

andreas.thele@ulg.ac.be

日本研究センター

同上

【ベルギー日本語教師会】

ベルギー日本語教師会は、上述のルーヴァン・カトリック大学内に設置されており、同大学日本語講師の櫻井直子氏が会長を勤めている。1997年に発足し、2ヶ月に1回の勉強会や、講師を招いての日本語教育ワークショップなどを行っている。

会長である櫻井直子氏の談話では、同教師会の設立目的は、ベルギー国内及びヨーロッパそして日本在住の日本語教師間のネットワーク構築や、日本語教育機関との連携強化であった。現在、日本語教育は日本が発信の中心であるから、海外における日本語教育の大きな問題は、新しい教材や情報が入手しにくいという点である。しかし、日本語教師会設立によって、ヨーロッパの日本語教師間のネットワークや、日本との連携が強化されつつあり、互いの知見を共有しあい、新しいことを学んでいくことができるようになってきた。

ベルギー日本語教師会ホームページ

<http://www.bnk-nihongo.be/>

【使用教科書の問題点】

ベルギーでは、オランダ語やフランス語で解説された、ベルギー独自の日本語の教科書は公刊されていない。授業では、日本の大学で出版された教科書などが使われており、これらは英語によって解説が書かれている。英語を母国語としないベルギーの学生にとって、これがハンディになるのかどうかという問題点についても、今回の聞き取り調査で投げかけてみた。

ヴァンドゥワラ主任教授（ルーヴァン・カトリック大学）は、オランダ語による日本語の教科書公刊は、大変困難であると認識している。なぜなら、オランダ語を母語とする人々で、日本語を学習する人口が少ないからである。要するに、ニーズが足りないということである。更に、今出回っている優れた英語の教科書に匹敵するくらいのオランダ語の教科書を作るには、かなりの労力を費やさねばならないので、人材を確保するのが難しい。だが、同教授はオランダ語を基盤とした日本語教育の必要性を強く感じている。なぜなら、ベルギーのオランダ語共同体では、学生は英語が十分できるという過度の認識があり、実は、母国ではない英語中心の日本語教育では、日本語の深い理解や、慣用的な使用を習得することが不可能だからである。

日本語教師会の櫻井直子会長は、将来的にはベルギー独自の、オランダ語による日本語の教科書ができる可能性はあると語った。その根拠の一つとして、欧州評議会が1996年に制定した「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」の存在が挙げられる。同枠組みは、外国語教育のカリキュラム、教科書、試験の作成及学習者の能力評価基準であるが、ヨーロッパ人が言語や文化の境界を越え、互いにコミュニケーションを図ることができる能力を開発せねばならないという、大きな目標のもとに制定された。日本語は、ヨーロッ

パにおける生活言語ではないが、ベルギーのオランダ共同体では、上記の「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」に基づいた日本語の教科書を作るべきであるという声もあり、独自の日本語教科書が誕生する可能性もあるということだ。

一方で、ゲント大学のニーハウス教授は、英語の使用に肯定的である。同教授が授業で用いている前述の教科書『げんき』（ジャパン・タイムズ）も英語による解説であるが、教授は学生の英語のレベルは十分であり問題はないと考えている。また、「近現代日本社会」のコースで使用する教科書も、以下の例の通り日本の著書の英訳版である。同教授は、オランダ語の教科書が無いことは、生徒にとってかえって良いと考えている。なぜなら、現在は英語のほうがもっと重要で役に立つからである。英語で読み、書き、コミュニケーションが取れることが重要だと考えている。

また、リエージュ大学のテーレ教授も、学生の英語のレベルは十分であるので、フランス語の教科書を使わなくてはならないという理由は無いと考えている。インターネットなどは英語なので、英語を使う必要性がある。

【学生の動機】

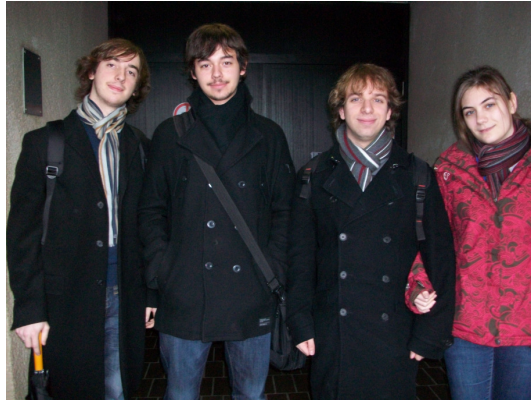
日本の経済成長期に日本語・日本学を選択した学生の動機と異なり、日本が経済不況下にあっても日本に興味があるという現在の学生は、ポップカルチャー（アニメ、マンガや映画）を通して日本に興味を持つケースが多いようだ。また、柔道や空手といったスポーツも、根強い要素である。しかし、実際学生達と話してみると、マンガやアニメ以外に興味を持っている場合も少なくなかった。フィールドワークで聞き取りを行った学生達の動機を、以下にいくつか紹介する。（名前はイニシャル。）

ルーヴァン・カトリック大学

SB：以前から、平安時代文化やサムライなど、日本の古いものが好きだった。着物の作り方や色使いなどにも興味があった。（ベルギーで行われた）ジャパン・ウィークで、アニメやマンガなど日本の新しい文化に触れた。その時に、大学では日本語を勉強しようと思った。「のだめカンタービレ」がとても好き。

JJ：日本の政治に興味がある。日本の政治は日本語で勉強する必要があると思って、日本語を選択した。60年代以降の政治に特に興味があるし、今は民主党が政権をとったので益々面白い。

JF：高校生のとき日本から来た留学生と会って、日本に興味を持った。今は、政治・歴史、それから沖縄方言などに興味がある。



ルーヴェン・カトリック大学の学部2年生達

ゲント大学

DL：宮崎駿のアニメが好き。それから、日本語の言葉がかっこいいと思った。サムライ映画もいい。中国は人権問題とか共産主義とか、色々と問題があるから好きではない。高校では日本に関することは何も学べなかったから、大学で勉強したいと思った。

NT：日本人の謝り方が面白いと思った。何度もお辞儀をして謝り続けるのが、ベルギー人と違う。

リエージュ大学

SG：友達にマンガを見せてもらってから、日本社会に興味を持つようになった。特に日本の宗教と思想に興味がある。ヨーロッパではキリスト教によって生活や文化が統一されている側面がある。でも、日本人は、特定の宗教を信仰しているわけではないが、日本人特有の考え方などがあって面白い。

JD：高校で英語、ドイツ語、スペイン語を勉強したから、大学ではアジアの言語を勉強したかった。マンガは、日本文化や社会を知るためのいい窓口。日本語の表現もマンガを通して学ぶことができる。卒業後は言語の先生になりたい。オーストラリアで日本語を教えることなどもできるかもしれない。



リエージュ大学の学部1年生と3年生

【卒業後の進路】

大学での日本語習得レベルが異なることから、一概には言えない。リエージュ大学では日本語は選択科目でしかないので、卒業時に日本語を仕事で使えるほどのレベルまで習得することは難しく、よって、日本企業へ就職する学生は少ない。(テーレ教授談。)一方で、ルーヴァン・カトリック大学のように日本語を専門に学べる大学では、卒業を日本企業に就職する学生も少なくない。特に近年は、コスト削減のために現地化を進める日本企業も増えてきており、日本語が使えるベルギー人へのニーズも高まりつつある(櫻井講師談)。

参考文献

国際交流基金（編）『ヨーロッパ言語共通参照枠組み(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)』

国際交流基金「日本語教育国別情報」国別一覧 □ ベルギー □
(<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/belgium.html> (2009年10月6日参照))

Vanoverbeke, Dimitri and Willy Vande Walle (2006) “Belgium” in The Japan Foundation (ed.) *Reports on Developments in Japanese Studies in Selected European Countries*. Pp.2-11